

きさべじょう
私部城 (交野城)

交野市教育委員会 吉田知史

はじめに

私部城（交野城）は、大阪府の北東部、交野市の私部に位置する平城である。私部城という呼称は、江戸時代の河内名所図会に記されており、現在も地元で定着し、市の遺跡名になっている。戦国期の史料では、「交野城」として記されており、文献史研究や城郭研究においてはこの呼称の方が一般的になっている。現在も私部には、本郭をはじめとして戦国期の「土の城」の姿が断片的ながらも維持されている。平城の多くがその姿を消した大阪府内で、現在も戦国期の平城跡を地上で確認できるのは、私部城以外では本丸が陵墓とされたことにより維持されている高屋城のみであり、この遺存状況は奇跡的とも評価されている。

また、単に残りが良いだけでなく、大阪府内の戦国期を考える上でも重要な城郭である。北河内は三好氏の強い影響下にあり、山城が割拠した地域である。それに対して私部城は、河内国守護であった畠山氏配下の安見氏によって築かれた反三好の平城として評価されてきた（中井 1982 ほか）。府内でめずらしい複数の郭を並列させる連郭式（群郭・列郭）の構造をとることから、異色の中世城郭とされる。近年も進展しつつある調査研究史の整理と、発掘成果をふまえて、私部城の歴史を追ってみよう。



写真 1 私部城本郭 北から

1 調査研究史

(1) 郷土史家の研究から城郭研究へ

北河内の郷土史家の研究によるところが大きい。平尾兵吾氏は、『北河内史蹟史話』で畠山氏配下の安見氏が築いた城とし、『信長公記』にもとづき、高屋城・若江城に次いで、織田配下の反三好の城として記されていることを紹介している。片山長三氏は『交野町史』において、『安見家系譜』などの地域に残る文書をもとに、南北朝期に安見氏が私部城を築き、畠山氏配下として活躍したとしている。また、私部城築城以前の居館の可能性があると見做し、私部の南部に位置するでがしろ遺跡をあげている(片山 1981)。

日本城郭体系では中井均氏作成の縄張り図が掲載され、本郭から三郭を取り囲む土塁や堀の跡など、これまで知られていなかった城の構造が明らかにされた(田代ほか編 1981)。また中井均氏は大坂・京都・奈良を結ぶ街道の近隣に位置する戦国期の要衝に位置することを指摘している(中井 1982)。中西裕樹氏は、安見宗房段階の城として公的性格を備えていた可能性を指摘した(中西 2004)。こうした研究において、私部城は、畠山氏配下の安見氏の城郭として注目されてきた。

(2) 安見氏研究から明らかにされた織田配下の城としての重要性

小谷利明氏や弓倉弘年氏らにより、戦国期畿内の守護の研究が進められる中で、安見氏の実態も明らかにされた(小谷 2003、弓倉 2006)。私部城を考える上で重要だったのは、軍記にあらわれる「安見直政」の記述から混同されることの多かった河内国上郡代「安見宗房」と、文献で確認できる最初の交野城主「安見右近」が別人物であることが判明したことだった。

馬部氏は、この成果に加えて戦国期前後の私部の様相を整理したうえで、私部城が織田配

下となった安見右近により築かれたものであり、それ以前の安見氏が私部に居城を構えていた可能性が低いとしている。その根拠として、①戦国期以前の私部城築城の根拠であった『安見家系譜』が偽文書であること、②安見右近の交野城が確認される以前の私部では有力な禅宗寺院であった光通寺が全盛期にあることが知られる一方で、安見氏の居城に関する記録が確認できないこと、③織田配下となる以前の安見右近がむしろ交野の星田に拠点を置いているとみられること、④昭和 29 年の航空写真から私部城の形態に織豊系



図1 私部城(交野城)と周辺の街道(中井 1982 に加筆)

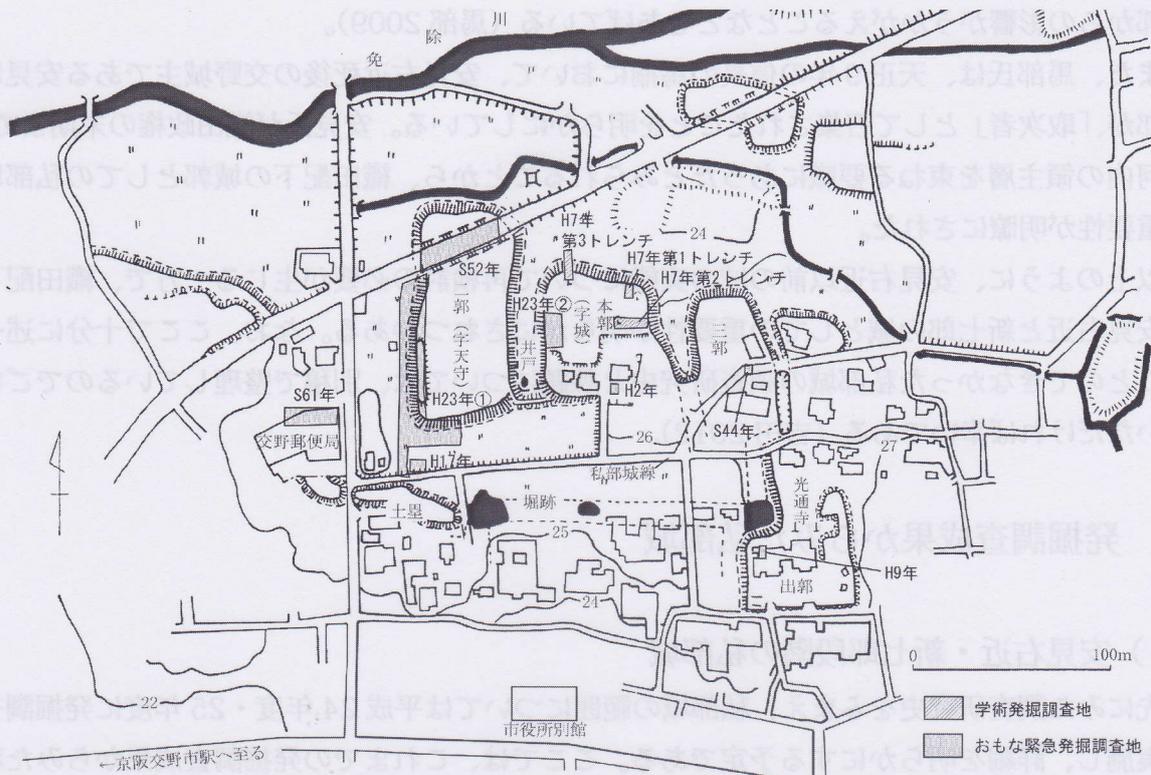


図2 中井均氏作成の私部城跡縄張り図と主な発掘調査地点 (中井 1982 に一部加筆)

表1 私部城跡の主要発掘調査成果

| 調査年 | 調査原因と調査種類 | 調査地点等 | おもな検出遺構など | おもな検出遺物 | 報告等 |
|--------|--------------------------|----------------|---------------------------------------|----------------|----------|
| 昭和40年 | 町道私部城線建設に伴う緊急発掘調査 | 第三郭中央部 | 遺構なし | 焼けた礎石・布目瓦・土器片 | 市教委 1995 |
| 昭和44年 | 水道・排水管敷設工事に伴う緊急発掘調査 | 第三郭南部 | 溝 (弥生集落の環濠の可能性) | 弥生時代中期の石包丁・土器片 | 町教委 1970 |
| 昭和52年 | 大阪市水道道建設工事に伴う緊急発掘調査 | 第二郭北部 | 遺構なし 焼土層の確認 | | 市教委 1995 |
| 昭和60年 | 交野市職員カークラブ駐車場整備に伴う緊急発掘調査 | 第二郭北部 | 遺構なし 郭造成時の盛土か | なし | |
| 昭和61年 | 交野郵便局建て替え工事に伴う緊急発掘調査 | 第二郭の西 | 遺構なし 地表下1mで青灰色砂層 | なし | 市教委 1995 |
| 平成2年 | その他緊急発掘調査 | 本郭南西部 | 遺構なし 地表下0.4mで地山層 | なし | 市教委 1995 |
| 平成7年 | 学術発掘調査 | 本郭北東部 (第1トレンチ) | なし | | 市教委 1995 |
| | | 本郭東部 (第2トレンチ) | 土坑 畝状遺構 (畑地の痕跡か) ピット・溝 | 多量の石・石造物・瓦 | |
| | | 本郭北西部 (第3トレンチ) | 堀の形態を確認 | 瓦など | |
| 平成9年 | その他緊急発掘調査 | 光通寺内 | 井戸? | 室町後期瓦 | 市教委 1998 |
| 平成17年 | 住宅建設に伴う緊急発掘調査 | 第二郭南部 | 溝 | 瓦器片 | 市教委 2006 |
| 平成23年① | 宅地造成に伴う緊急発掘調査 | 第二郭西部 | ピット、土坑等 第二郭の構築状況の確認 (北半盛土、南半が地山利用) | 瓦など | 市教委 2012 |
| 平成23年② | 個人住宅建設に伴う緊急発掘調査 | 本郭南西部 | (中世)ピット、溝 (弥生) 竪穴住居2棟 | 瓦器椀・土師器・弥生土器 | 市教委 2012 |

城郭からの影響がうかがえることなどをあげている（馬部 2009）。

また、馬部氏は、天正 9 年の信長の馬揃において、安見右近死後の交野城主である安見新七郎が、「取次者」として召集されたことを明らかにしている。安見氏が織田政権の末期まで、北河内の領主層を束ねる要職にあったとみられることから、織田配下の城郭としての私部城の重要性が明瞭にされた。

以上のように、安見右近以前の城の実態について再検討の必要が生じる一方で、織田配下の安見右近と新七郎の城としての重要性が明らかにされつつある。なお、ここで十分に述べることのできなかつた私部城の調査研究史と課題については、別稿で整理しているのでご参照いただければ幸いである（吉田 2012）。

2 発掘調査成果からみた私部城

(1) 安見右近・新七郎段階の私部城

先にみた調査研究史をふまえ、私部城の範囲については平成 24 年度・25 年度に発掘調査を実施し、詳細を明らかにする予定である。ここでは、これまでの発掘調査成果からみた私部城の姿を示しておきたい。

米軍撮影の昭和 23 年航空写真を下敷きにして、これまでの発掘調査と現地踏査の成果をふまえて推定した城の姿を図 4 に示した。ここで確認される城の痕跡は、廃城時に改変を受けている可能性はあるものの、基本的には、安見右近から安見新七郎の段階の姿を示すものとみられる。馬部氏はこの段階の私部城の構造の中で、本郭東にみられる外柵形虎口状の張り出しなどに織豊系城郭からの影響がうかがえることを指摘し、現在の光通寺付近にみられる道の屈折に計画的なプランを読み取った。ただ、本郭東の外柵形虎口状の張り出しは認められず、四郭東の虎口とされた部分は、現地踏査もふまえると、四郭には付属せずむしろ独立した郭の可能性が考えられる。千田嘉博氏による虎口形態からみた織豊系城郭の編年によれば、馬部氏が想定したような外柵形虎口が発達するのは、1576 年から 1581 年のこととされる（千田 2000）。これは織田信長による大坂平定が達成され、私部城の重要性も低下したとみられる 1575 年よりも後のことである。発展過程の織豊系城郭の影響下にあるとみる場合、私部城に外柵形虎口が認められないことは妥当であろう。

また、私部城の形成過程を考える上で重要なこととして、織田配下の安見右近により光通寺が破壊されたと記した寛文 4 年（1664 年）の光通寺棟札に関連する成果が本郭の発掘調査によって得られている（交野市教委 1995）。ここでは、被熱した石造物のほか多量の石、中世瓦などが集積された土坑が検出されている。これは本郭付近に寺院が存在したことと、私部城の本郭構築時にその寺院が破壊されたことを示すものと評価できる。また、三郭や、現在の光通寺境内の調査などでも中世寺院の存在を示す資料が得られている。この成果からは、光通寺棟札の記載が裏付けられるのみでなく、私部城域の完成時に、同地域で隆盛していた光通寺の範囲が取り込まれたこともわかる。織田政権下の大坂では、平野部を中心とし



図3 馬部氏作成の私部城跡縄張り図（馬部 2009 より転載）

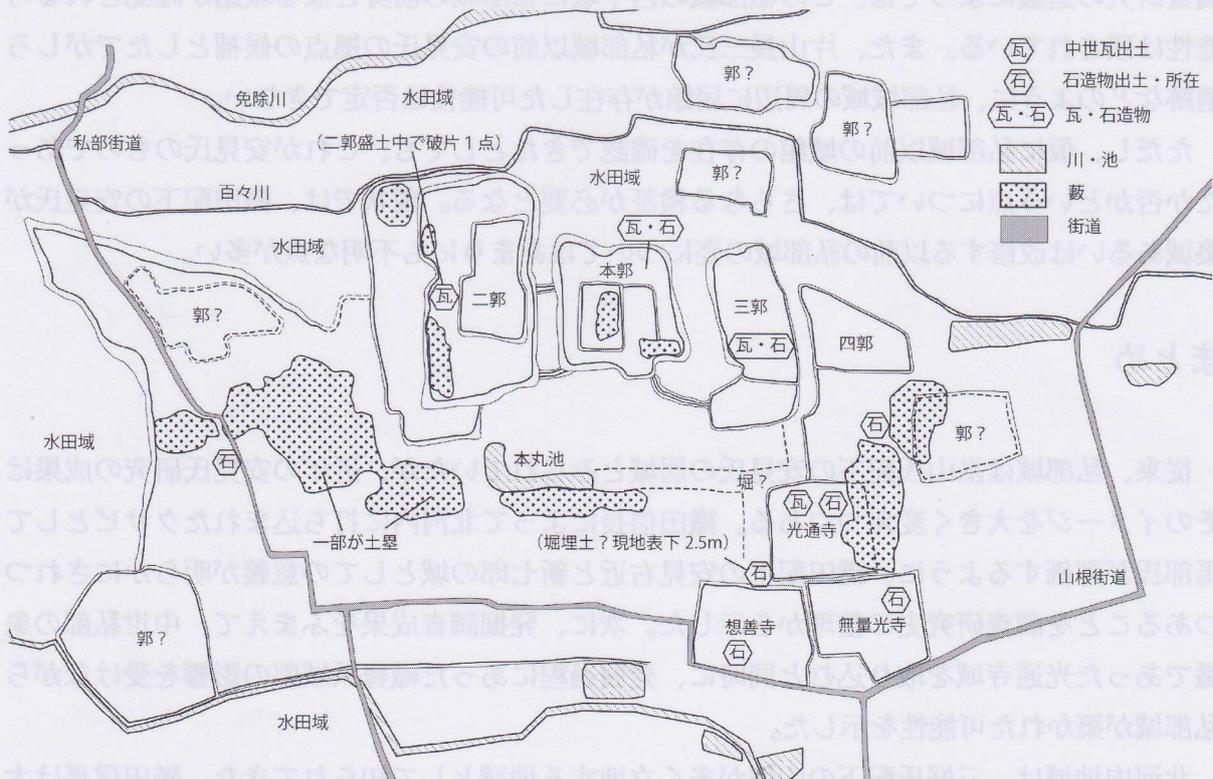


図4 私部城跡縄張り試案と寺院関連遺物の分布（昭和23年米軍航空写真をベースに作成）

て既存の寺内町や地域の拠点的城館を利用して配下の城郭が置かれていったことが中西裕樹氏によって明らかにされており（中西 2008）、その分類の中では私部城は寺内一体型に位置づけられる。

こうした調査成果からは、中世の私部を象徴する寺院である光通寺をとりこみながら、馬部氏も指摘するように、織豊系城郭からの影響を限定的に受けつつ私部城が築かれたことがうかがえる。馬部氏はここに安見氏の限界をみてとるが、発展段階の織豊系城郭の影響を受けたためともみられる。織田配下の安見右近・新七郎段階の私部城の構造について不明な点も多いものの、近世城郭へと発展していく過程にある織豊系城郭の影響が、大坂の城郭へどのように及んだのかという点を考える上で、私部城は重要な事例といえるだろう。

（2）安見右近以前の私部城の謎

織田配下となった安見右近以前の私部城の存在に対して、馬部氏による文献史研究によって否定的な見解が示されたのは先に述べたとおりである。現状の発掘調査成果から、馬部氏の見解に対する答えを用意することはできないが、考証するための材料は得られつつある。注目しておきたいのは、先にみた私部城以前の光通寺の存在を示すとみられる中世瓦や、石造物の分布状況である（図4）。これをみると、光通寺域の破壊と取り込みを示す寺院関連遺物が私部城域の東半に集中するのに対して、西半には二郭の盛土中の瓦片と街道沿いの石造物のみと、きわめて希薄であることがわかる。その一方で、二郭周辺などの私部城域西半では寺院関連遺物は認められないものの、中世前後の遺物は一定数確認されており、この周辺の高台が、安見右近による私部城構築以前から利用されていたこととうかがえる。今後の調査研究の進展によっては、この私部城の西半域に私部城の前身となる城館が確認される可能性は残されている。また、片山長三氏が私部城以前の安見氏の拠点の候補としたでがしろ遺跡などのように、私部城域の周辺に居館が存在した可能性は否定できない。

ただし、仮に私部城以前の城館の存在を確認できたとしても、これが安見氏のものであったか否かという点については、さらなる検証が必要となる。現状では、織田配下の安見氏が築城あるいは改修する以前の私部城の姿についてはあまりにも不明な点が多い。

まとめ

従来、私部城は畠山氏配下の安見氏の居城とみられていたが、近年の安見氏研究の成果はそのイメージを大きく変えつつある。織田信長によって北河内に打ち込まれたクサビとして馬部氏が評価するように、織田配下の安見右近と新七郎の城としての意義が明らかにされつつあることを調査研究史の整理から示した。次に、発掘調査成果をふまえて、中世私部の象徴であった光通寺域を取り込むと同時に、発展過程にあった織豊系城郭の影響を受けながら私部城が築かれた可能性を示した。

北河内地域は、三好氏配下の山城が多く立地する地域として知られてきた。織田信長は大

坂進出にあたって、山地部の城郭を中心とした三好三人衆などの勢力に対して、平野部の寺内や拠点的城市をその配下におき、大坂の掌握を実現していった過程が明らかにされている(中西 2008)。私部城は、この織田信長の坂進出の実態を示す可能性がある城郭として、極めて良好な遺存状況を維持しているという点で重要である。また、織田配下の安見右近以前の城の実態など、不明な点も多い。今後の調査によってその意義を明らかにしていくとともに普及と活用につとめることとしたい。

(参考文献)

- 内田大輔編 2005『交野市の石造文化財Ⅰ—私市・私部・神宮寺・倉治地区編—』、交野市教育委員会・(財)交野市文化財事業団
- 交野市教育委員会 1995『私部城跡発掘調査概要報告書Ⅰ』
- 交野市文化財事業団編 1995『光通寺』、交野市教育委員会・交野市文化財事業団
- 片山長三 1981『交野市史 交野町略史 復刻編』、交野市編纂委員会(1963初版、1970増補改訂)
- 小谷利明 2003『畿内戦国期守護と地域社会』、清文堂
- 千田嘉博 2000『織豊系城郭の形成』、東京大学出版会
- 田代克己・渡辺武・石田善人編 1981「交野城」『日本城郭大系』第十二巻 大阪・兵庫、新人物往来社
- 中井均 1982「交野城跡と北河内の城跡」『地域文化誌まんだ』第16号、まんだ編集部
- 中井均 2011「私部城の歴史と構造」『シンポジウム「私部城」資料集』、交野市文化財事業団
- 中西裕樹 2004「私部城」『図説中世城郭事典』、城郭談話会
- 中西裕樹 2008「畿内の都市と信長の城下町」『信長の城下町』、高志書院
- 馬部隆弘 2009「牧・交野一揆の解体と織田政権」『史敏』二〇〇九春号(通巻六号)、史敏刊行会
- 平尾兵吾 1972『北河内史蹟史話』(1931年初版)
- 福島克彦 2009『戦争の日本史 11 畿内・近国の戦国合戦』、吉川弘文館
- 三好孝一・佐伯博光編 2011『私部南遺跡Ⅲ』、(財)大阪府文化財センター
- 森田克行 1984『撰津高槻城本丸跡発掘調査報告書』、高槻市教育委員会
- 弓倉弘年 2006『中世後期畿内近国守護の研究』、清文堂
- 吉田知史 2012「わたしたちの文化財 私部城跡(交野城跡)」『ヒストリア』第233号、大阪歴史学会



写真2 昭和23年米軍航空写真にうつる私部城とその周辺

安見氏と私部城をとりまく時代

主なできごと

- ① 1559年
河内国守護畠山氏のもと、遊佐長教や安見宗房などの守護代の統治
- ② 1559～1564年
三好長慶の政権
- ③ 1564年～1568年
松永久秀・三好三人衆らの覇権争い

城郭の変化

- 山城主体。
- 守護所の高屋城などの公的
性格をもつ一
部の平城。

↓

↓

- 信長配下の平
城の増加。
- 近世的城郭へ
の変化。

- ④ 1568～1575年
織田信長の太坂進出

- ⑤ 1575年
信長による太坂平定

安見氏と私部城

- 安見宗房（直政）による私部城があった可能性は低くなりつつある。
- このころ、安見右近は交野の星田を拠点としている可能性が高い。
- 文献上で私部城の記載も認められない（『私心記』など）。
- 後の私部城域の大半は、有力な禅宗寺院であった光通寺域であったとみられる。
- 1565年、安見右近は、畠山氏配下として活動し、後に松永久秀の配下に。
- 足利義昭が松永久秀のおさめる枚方市津田城に入城したときに、その主戦力であった安見右近が私部城を築いた可能性がある（小谷利明氏教示）。
- 1568～1570年には織田配下となった安見右近による私部城が完成したとみられる。
- 1570年に三好三人衆に対抗した織田配下の勢力として、高屋城・若江城に次いで「片野の安見右近」が記される（『信長公記』）。
- 1571年に安見右近が奈良・多聞城で切腹に追い込まれる。直後に松永久秀・久通が私部城を攻める。城主不在の危機を持ちこたえる（『言継卿記』『多聞院日記』）。
- 1572年4月に松永久秀による私部城攻め。織田方の佐久間信盛・柴田勝家の援軍により松永軍を撃退する。同5月に織田勢による若江城、高屋城奪取の拠点とされている可能性高い（『信長公記』『誓願寺文書』）。
- 1578年に「交野安見新七郎所」にて信長が休息をとる（『信長公記』）。（河内平定以後も城の機能が維持された可能性がある。）
- 1581年の信長の馬揃に安見新七郎が「取次者」として参加（『立入文書』）。
- 豊臣政権下では交野の安見氏の記載は認められなくなる。

- 大阪に残る戦国期の平城は、私部城と陵臺指定を受けたために保存されている高屋城本丸のみ
- 山城から平城への移行期、織豊系城郭の形成期という、中世城郭から近世城郭への過渡期にある城
- 織豊系城郭の発展以前の畿内の平城の典型を考える重要な資料となる（城の構造、瓦利用の可能性など）
- 織田配下の城であり、信長の太坂進出時に織豊系城郭の築城術が与えた影響を探る手がかり